第５回病態生化学セミナーのご案内

日時：平成 20 年 1 月 8 日（火曜日）午後 6 時半～
場所：医学部看護学科棟１階Ｎ１１講義室
演題：白血病の病態と治療
演者：名古屋大学　大学院医学系研究科　血液・腫瘍内科学
直江知樹　教授

急性白血病の治療は、殺細胞効果の強い抗がん剤を大量に用い、汎血球減少期と感染・出血、それに続く完全寛解というドラマチックな経過をたどる。完全寛解は急性白血病の 80%に得られているが、寛解となった患者でもその半数以上が再発し、長期生存率は患者全体の 30%に留まっている。すなわち、急性白血病治療における課題は、残存白血病であるといっても過言ではない。このため、より高用量の抗がん剤あるいは同種造血幹細胞移植が行われてきた。しかし成績の向上は容易ではなく同種造血幹細胞移植のメリットは、50 才未満かつ予後不良の群にもたらされることが明らかになっている。

白血病により選択的でより効果的な新薬の登場は長年の夢である。急性前骨髄球性白血病に対するオールトランスレチノイン酸療法、慢性骨髄性白血病に対する Abl キナーゼ阻害剤は、夢を現実のものとすると同時に、新たな分子病態研究・標的治療への大きな原動力となってきた。シグナル系の異常として、受容体型チロシンキナーゼは最も高頻度に活性化変異が知られている。細胞内シグナル伝達分子として、RAS の活性化変異が高率で、抑制系の変異も知られている。血球の発生や分化に関わる多くの転写因子群にも、その転写機能に変調をきたすような変異が多く見出されている。正常核形 AML の半数近くで NPM1 変異が認められ、その意義が注目されている。講演では病態のレビューと共に新たな分子標的療法の開発についても紹介する。**【直江知樹】**

連絡先：
浦野　健
島根大学　医学部病態生化学
TEL 0853-20-2126
E-mail turano@med.shimane-u.ac.jp